

「能率」の共同体

近代日本のミドルクラスと  
ナショナリズム





# 「能率」の共同体

近代日本のミドルクラスと  
ナショナリズム

EFFICIENCY  
COMMUNITIES

MIDDLE CLASS AND NATIONALISM IN  
MODERN JAPAN

新倉貴仁

TAKAHITO NIIKURA

岩波書店



目次

序 章 想像の共同体から「能率」の共同体へ

——ナショナリズムと文化の社会学

- 第一節 問題の所在と研究の目的 2
- 第二節 近代日本における「文化」のナショナリズム 5
- 第三節 本書の視角——権力論と産業技術 9
- 第四節 問題の系列——二重構造、ミドルクラス、産業技術 15
- 第五節 本書の構成——四つの時代区分 19

第一章 量の技術と文化の時代——一九二〇年代……………23

第一節 総力戦と文化主義 24

第二節 能率への配慮——俸給生活者たちの生 42

第三節 文化生活と人口問題 61

第二章 ネーションをエンジニアリングする——一九三〇年代……………81

第一節 危機のなかの都市と農村——モダニズムとファシズム 82

第二節 国民、国土、国家のエンジニアリング 101

第三節 「機械」と「中間」の思想 118

第三章 数の技術と戦後社会——一九五〇年代……………135

第一節 復興と文化 136

第二節 数の技術と戦後の社会変容 151

第三節 「戦後」とミドルクラス 172

第四章 マイホームをマネジメントする——一九六〇年代……………189

第一節 ナショナルなものとニュー・レフト 190

第二節 マイホームの生 206

第三節 二重構造と思想の終焉 224

終 章 ネーションなきナショナリズムの時代に……………241

注

あとがき

図版出典

引用文献





序

章

---

---

# 想像の共同体から 「能率」の共同体へ

—— ナシヨナリズムと文化の社会学

## 第一節 問題の所在と研究の目的

### ナシヨナリズムという問題

現代社会において、ナシヨナリズムは、しばしば、亡霊にたとえられる<sup>(1)</sup>。現代のグローバル化は、国民国家を超えるさまざまな現象を含むが、ナシヨナリズムという問題は消え去ることなく、執拗に回帰してくる。そもそもナシヨナリズムという概念自体、その輪郭があやふやで、どこかで経験的な記述を逃れていくような対象である。にもかかわらず、ナシヨナリズムは、現代を生きる人々の生と死に深く関わり、ときに人々を強烈にひきつけ、しばりつける。本書が最終的に考えていきたいことは、このような現代社会におけるナシヨナリズムの亡霊的な位相である。

しかし、現代社会を考えるためには、なによりもまず歴史的な探究がなされなければならない。それは、「歴史の現在」を問う社会学の方法論的要請である。同時に、現代社会におけるナシヨナリズムが、かつてのナシヨナリズムの「死後」として、否定的にしか記述しえない対象になっている可能性があるためである。ここで念頭においていることは、一九九〇年代後半に、国民国家論やカルチュラ・スタディーズの研究の高まりのなかで、丸山眞男に代表される戦後知識人のナシヨナリズムが批判の対象となったことである<sup>(2)</sup>。これらのナシヨナリズム批判に対しては、グローバル化にともなう社会的不平等の拡大を背景として、一定の留保が付されるようになってきている。だが、重要なこと

は、一九九〇年代のナシヨナリズム批判の議論そのものを否定することではない。むしろ、それを近代日本におけるナシヨナリズムの言説史の一つの出来事として位置づける必要がある。

注目すべきは一九九〇年代とそれが批判する戦後とのあいだの断絶である。前者ではナシヨナリズムは否定的に語られ、後者では肯定的に語られていた。これは、論者の思考の限界に由来するものと片付けるのではなく、その実効性やもっともらしさをめぐる水準（実定性）での変容と考えるべきではないか。さらに、一九九〇年代のナシヨナリズム批判は、現代社会においてナシヨナリズムがネガティブにしか成立しえないことを意味しているのではないか。とするならば、ナシヨナリズムの解明のためには、むしろそれがポジティブな位相にあった時期にさかのぼり、その個々の言説と同時に、その言説をとりまく社会の諸条件を考える必要がある。そして、言説と社会の変容を考察することを通じてはじめて、現代社会のナシヨナリズムの様態を明らかにしていく道筋が開かれるであろう。

以上の問題意識にもとづき、本書では、第一次大戦後から高度成長期に注目する。この時期、「文化」の概念を機軸としたナシヨナリズムが繰り返し語られている。同時に、それを取り囲む社会では、「能率」や「生産性」といった言葉にあらわされる産業技術が進展し、都市のミドルクラス（中間層、中間階級）が拡大する一方で、都市と農村の格差が「二重構造」として問題化されていた。本書が考えたいのは、この言説と社会の両者の関係である。

### 想像の共同体から「能率」の共同体へ

ナシヨナリズムとミドルクラスとの関係、また、ナシヨナリズムと産業技術との関係という主題は、

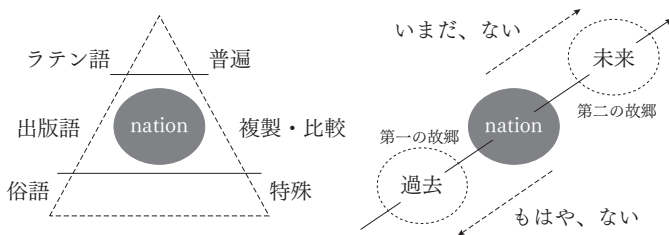


図0-1 ネーションの位置

ナショナリズム研究の古典的名著とされるベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』の議論を批判的に発展させるものである。<sup>(3)</sup>

ネーションという「想像の共同体」は活版印刷術を通じて成立する出版語の領域と重なる。出版語は、ラテン語(普遍)と俗語(特殊)のあいだに生じる。さらにこの空間的な位置は、過去と未来のあいだという時間的な位置に対応する<sup>(4)</sup>。ネーションおよびナショナリズムは、その本質において「中間」という性質を有する。そのためナショナリズムは、普遍と特殊、市民と民族、論理と心情、政治と文化、さらには知識人と大衆など、さまざまな二分法により整理されてきた。だが、このような議論は、しばしば、善悪の価値判断を恣意的に導入して不毛な二項対立に陥ってしまう。重要なことは、その手前で「中間」という性質の意義を考えることである。くわえて、ナショナリズムの成立と展開には、複製技術(≡機械的再生産 mechanical reproduction)が深く関わっている。これは、アンダーソンに特有の議論ではなく、マーシャル・マクルーハンが『グーテンベルクの銀河系』で先行して論じていたことである。<sup>(5)</sup> マクルーハンは、印刷技術を、彼が「機械」と呼ぶ問題の原型におく。そのメディア論は、「機械」から「電気」への移行という図式を提出するが、これは産業技術の高度化を背景としている。同時に、メディア論は技術による身体の変容を問うが、こ

れはミシェル・フーコーの権力論の問題構成とも共振する。

アンダーソンの「想像の共同体」の議論は、機械的再生産という産業技術の問題を内在させている。その産業技術は、第一次大戦を通じて、大衆社会を可能にする水準にまで到達する。このような途方もない量の生産を可能にしたものの一つが、「能率 efficiency」への志向である。知識人、政治家、企業家、官僚、技師が、「能率」の概念を通じて、自己の身体や他者との関係性を観察、記述しはじめる。第一次大戦後のネーションはそれまでと同様に「想像の共同体」である。だが産業化された戦争（総力戦、国民戦）の到来を背景として、そのネーションは「能率」の共同体と呼びうる相貌を備える。そこには過剰とも思える「能率」の追求がある。同時にそのような「能率」の追求は、現代社会に生きる私たちの生にも見出される。本書のタイトルとなつている「能率」の共同体とは、第一次大戦期にはじまり、おそらくは現代社会にまで伸びてきている個人と社会の関係性の変容の問題をしめすものである。

## 第二節 近代日本における「文化」のナショナリズム

### 戦前と戦後の連続、高度成長期の変容

一九九〇年代におけるナショナリズム批判が主な対象としたのは、丸山眞男に代表される戦後知識人のナショナリズムであった。このような批判をふまえ、小熊英二は『〈民主〉と〈愛国〉』のなかで、

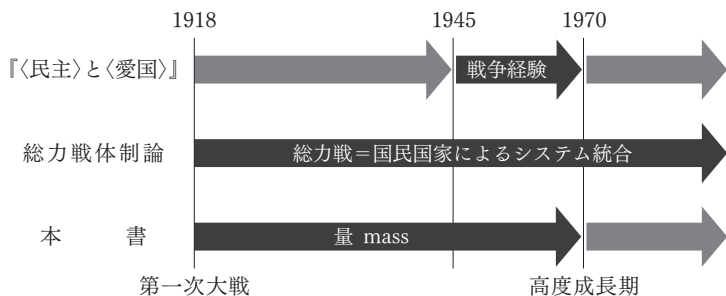


図0-2 本書が対象とする時期

戦後日本におけるナシヨナリズムの言説を分析している<sup>(6)</sup>。その推移をみるうえで、小熊は知識人の戦争経験に注目する。そして、戦後、革新を標榜する立場からのナシヨナリズムが高まること、そのナシヨナリズムが一九六〇年代末から一九七〇年代にかけて後退していくことをしめす。『単一民族神話の起源』やその後の『1968』といった著作でも明らかにされるように、高度成長期の終わり頃、ナシヨナリズムは批判的言及の対象にかわる<sup>(7)</sup>。しかし、小熊の議論は、この戦後のナシヨナリズムの持続と変容を、担い手となる知識人の戦争経験によって説明しようと試みる点で十分ではない。なぜなら、同型のナシヨナリズムが、戦前にさかのぼって観察されるからである。ナシヨナリズムとデモクラシーの結合を「文化」の概念を通じて説く議論は、戦前の文化主義者からつづくものである。

他方、戦前と戦後の連続性を重視する視座として「総力戦体制論」がある。特に山之内靖らの共同研究は、「現代化」という概念によって、戦前の統制経済を、戦後日本の経済および産業の体制に結びつける<sup>(8)</sup>。だが、戦前と現在の連続性を強調するあまり、この立場は、高度成長期の社会変容の意義を相対的に低く見積もっている<sup>(9)</sup>。また、総力戦体制の構想は第一次大戦にまでさかのぼる。高度成長

期は、日本社会の消費社会化の時期であると同時に、第一次大戦からつづくグローバルな資本主義の巨大な変容の時期にもあたる。高度成長期が終わらせるものは、第一次大戦後に総力戦をめぐる構想を含んで登場する産業資本主義の一つのありかたなのである。

戦後に隆盛し高度成長期に後退するナショナリズムを考えるためには、戦前からの連続性を射程に捉えなければならぬ。他方、戦前と戦後の連続性を考えるうえで、高度成長期による社会変容を重視し、それがあつた種のナショナリズムを終わらせた事実を考えなければならぬ(図012)。

### 第一次大戦後から高度成長期までの「文化」のナショナリズム

本書が描き出し、またその説明を課題とするのは、ある同一性をもったナショナリズムの言説が第一次大戦後から高度成長期にかけて、繰り返し知識人たちによって語られている事実である。その担い手は、前述の丸山眞男をはじめ、南原繁や矢内原忠雄、さらには第一次大戦後の文化主義者たちまでさかのぼる。その特徴は、①「文化」の概念を機軸とし、②主体的な個人⇨人格の確立を訴え、③ナショナリズムとデモクラシーとの結合を主張する。さらに、④ナショナリズムについての肯定的言及を基調として、⑤社会変革を志向する立場から発信されることである。本書ではこれを「文化」のナショナリズムと呼ぶ。

問題は、第一次大戦後に登場する「文化」のナショナリズムが、高度成長期以降、ある種の忘却にさらされ、一九九〇年代にナショナリズム批判の対象として振り返られることである。問うべきは、この持続と変容である。

もちろん、「文化」のナショナリズムを、「知識人のナショナリズム」と位置づけ、批判することも可能であろう。だが、「文化」のナショナリズムを論じるうえで、知識人と大衆という対は有効ではない。この対は、学歴や趣味の差異を資本の比喩で語ることで、持つものと持たざるものの擬似的な階級闘争を描き出す。この理解しやすさのなかで、大衆に準拠した知識人批判が可能になる。しかし、第一次大戦後から高度成長期において、新しく問われていたのはミドルクラスという中間に位置する人々であり、新しい現象としての大衆＝量massそのものであった。知識人は有識無産階級と呼ばれ、都市の新しいミドルクラスの代表であり、大衆はこの新しい社会層を含んで成立していた。ミドルクラス、大衆社会、ナショナリズムの関わりを考えるのであれば、知識人と大衆という問題構成は変更されなければならない。むしろ両者を析出する社会において、どのようにナショナリズムが分節されるのかを考察しなければならない。すなわち、「文化」のナショナリズムは、知識人と大衆の対立からではなく、機械と能率という産業技術との相関から解明されるべきである。

「文化」のナショナリズムは、第一次大戦後の文化主義を始まりとする。同時期、第一次大戦を目の当たりにして、総力戦という構想が登場する。総力戦は持久戦を意味し、その総体の力の把握と向上をめざす対象として「国民」が浮上する。同時に第一次大戦は思想だけではなく日本社会をも変容させる。輸出の増大とともに産業化が進み、都市が拡大する。また産業の高度化にもない経営事務が増大し、大学が拡張される。学生の増加を通じ、都市のミドルクラスが拡大する。第一次大戦後、近代日本の都市部は、先駆的に「大衆社会」という「量massの社会」に到達している。だが、量massとは不気味なかたまりであり、特有の社会性をもつ。第一次大戦末期に流行したスペイン・イ



ンフルエンザは無数の死をもたらす。それがグローバルな人や物の移動と都市空間への集積によって生じるように、日本社会は量 mass を生み出すことを可能にした産業資本主義のなかに組み込まれ、それを通じて自己を改造し、大きな変貌を遂げ、別の戦争へと向つていく。その趨勢は戦争によって中斷されるのではなく、むしろ、加速する。戦後にはより高度な産業技術が到来し、高度成長期における社会の変容を導く。機械と能率の産業技術は、第一次大戦後から高度成長期までの社会に、ある同一性をもたらしている。本書は、この「量 mass の社会」という観点から、「文化」のナシヨナリズムの持続と変容を考察していく。

### 第三節 本書の視角——権力論と産業技術

#### 産業の高度化(1)——フォードと量 mass

見田宗介は、一九九〇年の文章で、戦後の四五年間を〈理想〉の時代／〈夢〉の時代／〈虚構〉の時代として整理した<sup>(10)</sup>。ここで問われているのは、大きくは〈理想〉から〈虚構〉へとという推移であり、高度成長による社会の変容である。いずれもが「現実」の対義語となっているように、高度成長は「現実」を観察し記述するための参照枠組みの水準において、巨きな変化をもたらす。そして、「虚構」という性格は、いまなお、私たちが生きる社会を規定しつづけている。

しかし、この変容は、日本という社会にのみ通用するものではない。それは、グローバルな資本主

義という巨大な背景のなかで理解されうる問題である。一九六〇年代から一九七〇年代にかけての世界の資本主義の変容は、マイケル・ハートとアントニオ・ネグリの共著『帝国』の主題である。ハートとネグリは、国民国家とは異なる主権の形態として〈帝国〉の登場を論じるが、この変容は「規制的統治性」の変化として述べられる。それは、「労働の組織化におけるテラー主義、賃金体制におけるフォード主義、社会のマクロ経済的調整におけるケインズ主義」を総合した三位一体であり、「近代福祉国家を構成する」<sup>(11)</sup>。このいずれもが、ヴェトナム戦争によるアメリカ合衆国の疲弊と、ブロン・ウッズ体制の崩壊による危機のなかで揺らぐ。同様に、デイヴィッド・ハーヴェイも『ポストモダニティの条件』のなかで、一九六〇年代から一九七〇年代にかけての時期を、フォードイズムの蓄積からフレキシブルな蓄積への変容として論じる。<sup>(12)</sup>

ここであらためて、フォードのシステムに注目したい。なによりもそれは産業資本主義における「量mass」の生産のモデルだからである。一九〇八年にT型フォードが発売される。それは、部品の標準化や作業工程の分割など、徹底した機械化と合理化を通じて可能になる大量生産品である。その成功のなか、一九一四年には、日給五ドル、八時間労働、週休二日制が導入される。以降、フォード社は、一九一九年までに、自動車の生産台数を四倍以上に伸ばし、数十万の自動車を作り出し、価格を四分の一程度にまで下げる。他方で、一九一四年にはじまる第一次大戦は大量殺戮の時代の幕開けを告げる。累計で一〇〇万人ともいわれる死者の数は、前世紀のあらゆる戦争の規模をしのご。自動車の大量生産を可能にした産業技術は、途方もない量の死体をも大量生産しうる。

さらに重要なことは量massが単純な生産の様式ではなく、特有の社会性をもつことである。スー